

# JAPAN DENTAL HYGIENISTS' ASSOCIATION

# 歯科衛生だより

2021 August vol.64

発行人／吉田 直美  
発 行／公益社団法人 日本歯科衛生士会  
〒169-0072 東京都新宿区大久保2-11-19  
TEL.03(3209)8020 FAX.03(3209)8023  
<https://www.jdha.or.jp/>

## 認知症の高齢者と義歯の適応、そして義歯卒業宣言

伊東歯科口腔病院 歯科医師 廣瀬 知二

### はじめに

義歯(入れ歯)を入れたら認知症が改善した、歩けるようになった、といった内容の情報が一時美談のように報道されました。義歯に期待される効果が強調されて説かれる機会も多いことから、義歯装着にこだわる患者家族・関係者は少なくありません。

認知症でない65歳以上の日本人4,425人を対象とした4年間の調査では、残っている歯が少なく、かつ義歯を使っていない人は、20本以上歯が残っている人の1.9倍認知症の発症リスクが高いと報告されています。さらに、残っている歯が少なくても義歯を使用することで、認知症の発症を抑制する可能性も示されています<sup>1)</sup>。しかし、認知症が進行して義歯の必要性が理解できなくなった患者にとって新たに口の中に入ってくる義歯は異物でしかなく、装着を強要することは困難です。また、すでに義歯を使用してきた患者であっても認知症が進むと使用できなくなる時期が到来します。

### 義歯適応の見極めは歯科医師へ

要介護高齢者を対象に義歯使用について研究した論文によると、認知症の程度、基本的な日常生活動

作(食事や着替えの自立、日時の認識など)や、口腔ケアの自立などの項目で低下が認められる高齢者は、義歯を製作しても使用率は低いと報告されています<sup>2)</sup>。その理由として、①新しい義歯への順応が難しい、②意思の疎通が困難なため医療者からの開閉口等の指示に従えない、また痛みを感じても適切に表現ができないために義歯製作や調整に支障をきたし、十分に治療を行えない、③義歯を使用せずに軟食の摂取が習慣化していることにより、患者にとって義歯

日本歯科衛生学会 第16回学術大会  
THE 16TH ANNUAL MEETING OF THE JAPAN SOCIETY FOR DENTAL HYGIENE

**新しい日常を支える  
口腔健康管理**

会期 2021年9月18日㈭～30日㈮

開催形式 Web開催 (オンライン配信)

特別講演 1	新しい日常を支える口腔健康管理 歯周炎予防と歯科衛生士の役割
特別講演 2	認知症高齢者と歯におけるCOVID-19分知識 東京大学医学部連携研究会
教育講演 1	歯科衛生士教育における歯科実習質問 歯科衛生士教育実習会場の実習実習会場
教育講演 2	歯科衛生研究の進め方 ・歯科衛生研究のイメージ ・歯科衛生研究の立案 ・歯科衛生研究の実施 ・歯科衛生研究の発表 ・歯科衛生研究の評議会
教育講演 3	うなぎの寝床と歯科衛生士の仕事 歯科衛生士の仕事と歯科衛生士の仕事
教育講演 4	日本歯科衛生学会 歯科衛生士の仕事と歯科衛生士の仕事
基調 演者	歯科衛生士の仕事と歯科衛生士の仕事

主催：日本歯科衛生学会 / 共催：日本歯科被服供給会・日本歯科衛生士会  
共管：一般社団法人日本歯科衛生士会  
組織：日本歯科衛生士会・一般社団法人日本歯科被服供給会

日本歯科衛生学会 第16回学術大会  
9月18日(土)～30日(木)Web開催  
参加登録は、9月1日(水)までです。会期中の参加登録はできませんのでご注意ください。

QRコード

装着の必要性が少なくなっている、が考えられます。しかし、その一方で、重度の認知症であっても義歯を使用している患者も少なくないため、単に認知症を理由に義歯の使用が不可能と判断するべきではありません。

筆者は義歯を新しく製作する前に、

- 患者自身が義歯の必要性を理解している。
- 介護環境を含めて義歯の管理(衛生状態・誤飲や紛失防止)は確保される。
- 義歯の装着経験がある。

この3点を確認して、該当しない場合は治療を進めても、義歯の使用に至らない可能性が高いと判断しています。しかし、歯がない状態を放置したくないという家族の強い希望がある場合は、義歯が使用できる可能性が低いということを十分に理解していただいたうえで、安全性の確保を前提に治療を進めるケースもあります。

また、今まで使っていた義歯の装着を嫌がる、吐き出してしまう、義歯を装着するとかえって食事時間が長くなるといった場合も、まず歯科医師の診察を受けましょう。義歯の破損や、現在のお口の状態やかみ合わせの状態と義歯が適合していない場合は、修理や調整による改善が必要です。それらに問題がないにもかかわらず義歯の装着を拒む場合は、歯科医師は義歯装着の中止を検討します。

## 口の動きも二度童？わらし

人が年老いて、再び子どものようになることを二度童といいますが、口の動きにも乳児期と同様な現象が再現することがあります。

刺激に対して、意識とは無関係に起こる筋肉の反

応を反射といいます。その中で乳児期に見られ成長とともにだんだんと消えていく反射を原始反射といいます(図1)。口腔に再出現する代表的な原始反射が吸啜反射、口すぼめ反射、咬反射です(図2)。口腔ケア

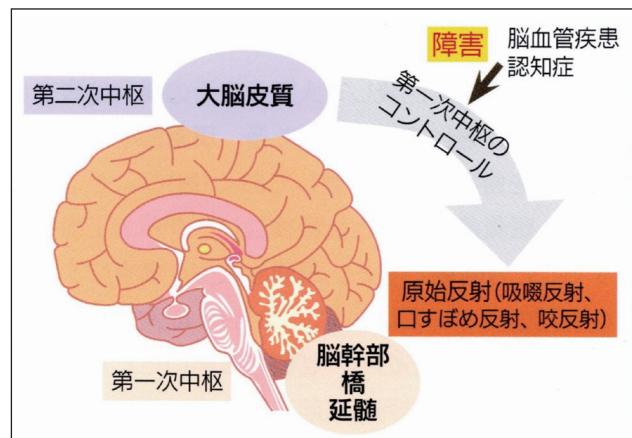


図1：原始反射再出現のメカニズム。第一次中枢で司られている原始反射は、健康な成人では大脳の発達により第二次中枢でコントロールされて反射が抑え込まれた状態になっている。しかし脳血管疾患や認知症により、そのコントロールが障害されると原始反射が解放されて再出現する。(文献3より転載)



図2：口腔に再出現した原始反射。

(A) 吸啜反射：指を口腔内に入れると、口唇や硬口蓋、舌、下顎でしっかりと捉えて舌は前後に動く。



(B) 口すぼめ反射：上口唇の中央を指さぎで軽くたたくと、口唇が突出してしわができる。



(C) 咬反射：下顎臼歯部に指や歯ブラシを置いたときに、噛むような下顎の上下運動がみられる。(文献3より転載)

や食事介助の時に、認知症高齢者が「なかなか口を開けない」、「スプーンを噛んでしまう」といった相談を介護者から受けることがあります。歯ブラシやスプーンが唇に触れると口をすぼめてあたかも拒否しているように見えるのは口すぼめ反射と考えられます。また、口腔ケアの時に歯ブラシを噛んだり、食べ物を口にいれたままいつまでも下顎を動かし続けたりするのは咬反射の可能性があります<sup>3)</sup>。

## 義歯卒業

筆者はこれらの口腔に関連した原始反射の再出現を義歯卒業(義歯使用中止)の1つの目安にしています。その中でとくに注目するのは咬反射です。咬反射による下顎の動きは、一見咀嚼運動を行っているように見えますが、そうではありません。単純な上下運動の繰り返しで、舌は前後または上下の動きが中心です。この運動では、適合が良い義歯を使っていても、自分の歯がすべて残っていても咀嚼が不可能です。咬反射による下顎の動きを本来の咀嚼と見誤って、咀嚼が必要な形態の食事が提供されていることがあります。その場合は口腔内で、食物の粉碎とのどへの送り込みが十分にできないため、窒息・誤嚥の危険を伴います。この段階では食物の窒息・誤嚥と低栄養の予防を念頭に、義歯の使用を中止して咀嚼を必要としない食形態へ変更します。

義歯卒業は経口摂取が不可能ということではありません。食事形態の適切な選択や、食事介助の工夫により経口摂取を継続できることがほとんどです。いままでに述べてきたことが義歯卒業の目安です。その他に、義歯により粘膜を傷つけてしまう(図3)、義歯自体を誤飲してしまう可能性が高い場合も義歯の使用を中止せざるを得ません。いずれの場合も最終的判断は歯科医師に委ねましょう。



図3：義歯の一部が舌に刺さり抜けなくなったため、救急搬送された70歳代男性。

## おわりに

2025年には認知症の人は700万人前後になり、65歳以上高齢者に対する割合は、約5人に1人に上昇すると推測されています。認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)では7つの柱が提示されています。その2つ目の柱として、「認知症の容態に応じた適時・適切な医療・介護等の提供」が示されています。この基本的な考え方、「発症予防⇒発症初期⇒急性増悪時⇒中期⇒人生の最終段階」といった認知症の容態の変化に応じて適時・適切に切れ目なく、そのときの容態に最もふさわしい場所で、医療・介護が提供される仕組みを実現することが示されています。今、義歯についても「認知症の容態の変化に応じた適時適切な対応」が求められています。

### 参考文献

- Yamamoto T,et al.Association between self-reported dental health status and onset of dementia: a 4-year prospective cohort study of older Japanese adults from the Aichi Gerontological Evaluation Study (AGES) Project, Psychosom Med,74 (3):241-248,2012.
- 日本老年歯科医学会(編).認知症の人への歯科治療ガイドライン.東京:医歯薬出版,2019.
- 廣瀬知二.歯科訪問診療のやりがい よもやま話 第5回:認知症高齢者の義歯適応、そして義歯卒業宣言.QDT,45(5):60-61,2020.